



# わたしの聖戦

女性が働くことについて

114

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

## 関心と無関心の間

東京駅構内を歩いていると、人の多さに辟易する。ある人は吐き気やめまいがすると言い、ある人は何か事件でも起こったのかといぶかる。

とにかく信じがたいほどに混雑しているので、ぶつからないように歩くのが結構大変だし、ぶつかったとしても構わず進む人がほとんどだ。まさにわが道を往く、という感じ。

を進めることが求められる。大都会の鉄則だろう。

無関心でいるということとは興味を抱かないことでもある。AKBに代表されるような女子ユニットが大人気の昨今、かつてのにおいゃんこクラブのように、あるいはスクールメイツのように似たような女の子たちが踊ったり歌ったりする、そんなグループがやたら目につく。彼女らの人気絶大なのは知っているが、正直私などメンバーの顔がほとんど同じに見える。これは年齢のせいだろうか。

り「関心度」が大きく影響しているように思う。それが証拠に、同じ年代の男性で、全員のメンバーの名前が言えたり、嬉々としてコンサートに通ったりしている人がいる。彼と、顔の区別もつかず名前を言われてもさっぱりわからない私との差は、



とばかり考えている自分に気がついて少しびっくりする。そのときはもう時遅し、すでに恋に落ちていることが多い。恋はするものではなく落ちるものだというのは名言である。

対象が何にせよ、関心があるのか関心がないのか、というの

重要なことかもしれない。特定の人に関心があれば、それは恋心に発展するかもしれないし、食べることや食材への関心が強ければ、料理の達人になれるかもしれない。

やはり「関心度」だと思う。

恋のはじめは、それと気づかないことがある。明確な意識はないが、ただ何となく気になったり、顔を見てホッとしたりする。そのあたりから始まって、次第にその人のこ

いない。関心があれば、それだけの魅力が題材にあれば、おのずと学習能力は伸びる。好きこそものの上手なれ、とはこのことだろう。勉強にも遊びごころは必要なのだ。

いよいよ本格的な高齢社会の到来だ。自分が年を取っていくのは誰もがはじめての経験だから、戸惑いもあり不安もある。先がわからないから不安だという人もあれば、先がわからないからこそ楽しみだ、という考え方もある。当然後者のほうが満足度の高い人生につながるように思える。

誰にも何に対しても関心が持てないという人は、まずは自分自身に関心を持つことだ。その矛先は、いずれ他人や周囲の出来事に向けられる。楽しい老後の第一歩は「関心」の度合に左右される、そんな気がしている。

イラスト・伊藤栄章